東京外国語大学『語学研究所論集』第 21 号（2016.3）, 67-75

「情報構造と名詞述語文」調査例文（ドイツ語）

成田　節

特集「情報構造と名詞述語文」のアンケートに沿って，ドイツ語の例文を挙げながら簡単な説明を付ける．[1]

(1) 「えっ，ハンスが来たの？」「いや，ハンスじゃなくてペーターが来たんだ.」

M: Was? War Hans da?	N: Nein, nicht Hans, sondern **Peter** war da.[2]
what was$_{\text{-3SG}}$ Hans$_{\text{-NOM}}$ there	no not Hans$_{\text{-NOM}}$ but Peter$_{\text{-NOM}}$ was$_{\text{-3SG}}$ there[3]
何？ハンスがその場にいたの？	いや，ハンスではなくペーターがその場にいた.

【対比焦点（主語）】昨日の集まりに珍しくやって来た人について話していて，M が明確に聞き取れずに問いただし，N が訂正しながら答えるという設定.「A ではなくて B が」という対比は，英語の not A, but B に相当する nicht A, sondern B で表現する．B に当たる Peter にアクセントが置かれる.

(2) 「誰が来た（の）？」「ハンスが来たよ.」

M: **Wer** war da?	N: **Hans** war da.
who$_{\text{-NOM}}$ was$_{\text{-3SG}}$ there	Hans$_{\text{-NOM}}$ was$_{\text{-3SG}}$ there
誰がそこにいた？	ハンスがそこにいたよ.

【WH 焦点（主語）・WH 応答焦点（主語）】(1)と同様，昨日の集まりに誰が来たかを話しているという想定．M の疑問文では疑問詞 wer に，N の答えの文では主語の Hans にアクセントが置かれる．なお，複数の人物を念頭に置いて「そもそも誰々が」というように疑問の気持ちを強めるには，たとえば定動詞 war の後に alles（＜all「すべて」に中性・単数・主格の語尾-es を付けた形）を添えて Wer war alles da? とすることもできる．[4] この場合ア

---

[1] 例文の容認度判定に際して，本学のディアナ・バイヤー=タグチ特任講師の協力を得ることができた．例文の容認度は当然インフォーマントによっても異なる場合があるので，本稿では文法書などの事例で適宜補った.

[2] それぞれの【 】で示されたポイントに関連してアクセントの置かれる語は太字で示す.

[3] 本稿ではグロスに以下の略号を使う．ACC:対格，ADJ:形容詞，COMP:比較級，EXP:虚辞，IMP:命令形，INF:不定形，NOM:主格，PART:不変化詞（心態詞など），PAST: 過去形，PP:過去分詞，PRES: 現在形，REFL:再帰代名詞，REL:関係代名詞，3PL:3 人称複数，3SG: 3 人称単数.

[4] 匿名の査読者から，alles を添えた Wer war alles da? は疑問文ではなく感嘆文ではないかとの指摘があった．確かに疑問詞と alles（特に nicht alles）を用いた感嘆文の存在は一般

クセントは最後の da に置かれるとのことである.

(3) 「ハンスの方が大きいんじゃないの？」「いや，ハンスじゃなくて，ペーターの方が大きいんだよ.」

M: Ist nicht Hans größer?
is$_{\text{-3SG}}$ not Hans$_{\text{-NOM}}$ taller$_{\text{-COMP}}$
より大きいのはハンスじゃないの？

N: Nein, nicht Hans, sondern **Peter** ist größer.
no not Hans$_{\text{-NOM}}$ but Peter$_{\text{-NOM}}$ is taller$_{\text{-COMP}}$
いや，ハンスじゃなく，ペーターがより大きい.

【Yes No 疑問・形容詞述語応答焦点】ハンスとペーターの背の高さについて話している状況での会話．答えの文の「A ではなくて B（の方）が」は(1)と同様に nicht A, sondern B で表し，B にアクセントが置かれる．なお，問いの文の nicht（英 : not）は文字通りの否定ではなく，相手の同意を期待する気持ちを表している．この nicht は größer の直前に置くこともできる．両者の差は微妙なものだが，敢えて区別するならば，Ist nicht Hans größer? は「（より大きいのは）ハンスじゃないの？」，Ist Hans nicht größer? は「（ハンスが）より大きいんじゃないの？」とでもなるだろう．また平叙文の語順で Hans ist nicht größer? ↗と上昇イントネーションで発話すると，想定が外れていたことについての話者の驚きの気持ちが表され，感嘆文に近づく.

(4) （電話で）「どうした（の）？」「うん，今，お客さんが来たんだ.」

M: Was ist denn los?
what$_{\text{-NOM}}$ is$_{\text{-3SG}}$ $_{\text{PART}}$ going.on
何が起こったの？

N: Es ist gerade **jemand** gekommen.
it$_{\text{-EXP}}$ is-$_{\text{3SG}}$ just someone$_{\text{-NOM}}$ come$_{\text{-PP}}$
ちょうど誰かが来た.

【文焦点（自動詞文）】電話の向こうで物音あるいは話し声が聞こえて M が「どうしたのか」と尋ねるという設定．疑問文の denn は，質問の調子を和らげる働きをしている.[5] N の応答の「うん」は特に表現しない方が自然とのこと．定動詞 ist と文末の gekommen で現在完了形になっている．文頭の es（英 : it）は虚辞（expletive）で，主語の jemand（someone）

に知られている．例 : Was lag da nicht alles auf dem Tisch!「テーブルには何から何まで（ごちそうが）あったなあ」（Duden 2009: 304）．特に定動詞が後置される場合は感嘆文と見て間違いないだろう．例 : Was du nicht alles kannst!「君はまあ何だってできるんだね」（小学館大独和辞典）．しかし，wer (who) や was (what) などの疑問詞に alles を添えた疑問文も問題なく容認される．例 : Was steht alles im Bericht?「報告書にはそもそも何が書いてある？」（Duden 2009: 305），Was hast du alles gesagt?「君はどんなことをいろいろとしゃべったのか」（小学館大独和辞典）.

[5] 場面によっては，denn で話し手の〈驚き〉〈疑問〉〈いらだち〉〈不快〉〈非難〉などの気持ちが表されることもある．（岩崎 1998: 257）

をはじめとする実質的な情報を担う語句を文頭に出さずに, 定動詞 ist を第 2 位に置くことを可能にしており，文全体が新情報になるような表現によく用いられる．アクセントは jemand に置かれる．

(5) 「あの子がハンスを叩いたんだって!?」「いや，ハンスじゃなくて，ペーターを叩いたんだよ.」

M: Hat der Kleine Hans gehauen?
has$_{\text{-3SG}}$ the little.boy$_{\text{-NOM}}$ Hans$_{\text{-ACC}}$ hit$_{\text{-PP}}$
あの小さな男の子がハンスを叩いた？

N: Nein, er hat nicht Hans, sondern **Peter** gehauen.
no he$_{\text{-NOM}}$ has$_{\text{-3SG}}$ not Hans-$_{\text{ACC}}$ but Peter$_{\text{-ACC}}$ hit$_{\text{-PP}}$
いや，彼はハンスではなくペーターを叩いた.

【対比焦点（目的語）】「A ではなく B」は(1)や(3)と同様 nicht A, sondern B で表される．ただしこの場合は hauen「叩く」の目的語なので A も B も対格である．B に当たる Peter にアクセントが置かれる．

(6) 「赤い袋と青い袋があるけど，どっちを買う（の）？」「(私は）青い袋を買うよ.」

M: Guck mal, hier ist eine rote und eine blaue Tasche. **Welche** möchtest du?
look$_{\text{-IMP PART}}$ here is$_{\text{-3SG}}$ a red and a blue bag$_{\text{-NOM}}$ which$_{\text{-ACC}}$ want$_{\text{-2SG}}$ you$_{\text{-NOM}}$
ほら見て，ここに赤と青のバッグがある． どっちをあなたは欲しい？

N: Ich möchte die **blaue**.
I$_{\text{-NOM}}$ want$_{\text{-1SG}}$ the blue$_{\text{-ACC}}$
私は青いのを欲しい.

【対比焦点（目的語，特に「どっち」という対比的な疑問語の場合）】M の Guck mal は「ほら見て」と相手の注意を引く表現．Tasche「バッグ」が女性名詞・単数形なので，M の 2 文目の Welche「どっち」も女性・単数・対格の語尾 -e が付いている．N の答えでは blaue の後に Tasche を繰り返すこともできる．アクセントは M では Welche に，N では blaue に置かれる．

(7) 「ハンスはどうした？」「ハンスは朝からどっかへでかけたよ.」

M: Wo ist Hans? あるいは Was macht Hans?
where is$_{\text{-3SG}}$ Hans$_{\text{-NOM}}$ what$_{\text{-ACC}}$ does$_{\text{-3Sg}}$ Hans$_{\text{-NOM}}$
ハンスはどこにいる？ ハンスは何をしている？

N: Er ist heute schon früh **los**. （または schon **früh** los）
he$_{\text{-NOM}}$ is$_{\text{-3SG}}$ today already early away
彼は今日すでに早く出かけている.

【述語焦点】朝少し遅く起きて来たハンスの父親が，姿の見えないハンスについて母親に尋ねるという設定．N の答えでは ist と los の 2 語で「出かけている」という意味．述語に焦点が置かれるという設定なので los にアクセントを置くことも可能だが，文中に schon früh「すでに朝早く」があり，こちらが焦点になることも十分にあり得る．インフォーマントによれば，この文脈では früh にアクセントを置く方が自然とのことである．

(8) 「（あの子は）誰を叩いたの？」「（あの子は）自分の弟を叩いたんだ.」

M: **Wen** hat der Kleine gehauen?
whom$_{\text{-ACC}}$ has$_{\text{-3SG}}$ the little.boy$_{\text{-NOM}}$ hit$_{\text{-PP}}$
あの小さな男の子は誰を叩いた？

N: Er hat seinen kleinen **Bruder** gehauen.
he$_{\text{-NOM}}$ has$_{\text{-3SG}}$ his little brother$_{\text{-ACC}}$ hit$_{\text{-PP}}$
彼は自分の弟を叩いた.

【WH 焦点（目的語）・WH 応答焦点（目的語）】どちらの文でも定動詞 hat と文末の過去分詞 gehauen で現在完了形となっている．(2)と同様，疑問文では疑問詞 wen に，返答ではそれに対応する名詞句（の主要部 Bruder）にアクセントが置かれる．どちらも対格である．

(9) （電話で）「どうした（の）？」「うん，ハンスが（自分の）弟を叩いたんだ.」

M: Was ist denn los?
what$_{\text{-NOM}}$ is$_{\text{-3SG}}$ $_{\text{PART}}$ going.on
何が起こったの？

N: **Hans** hat seinen kleinen **<u>Bruder</u>** gehauen.
Hans$_{\text{-NOM}}$ has$_{\text{-3SG}}$ his little brother$_{\text{-ACC}}$ hit$_{\text{-PP}}$
ハンスが自分の弟を叩いた.

【文焦点（他動詞文）】電話の向こうで子供の泣き声が起きたのを聞いて M がどうしたのかと尋ね，N が状況を伝えるという設定．M の問いでは ist と los の 2 語で「起こった」という意味．応答文は(8)の主語が人称代名詞 er，(9)の主語が固有名詞 Hans という点だけが異なるが，(9)では「ハンスが弟を叩いた」全体が新情報なので，アクセントの置き方も異なる. (9)ではまず Hans に第二アクセントが, そして Bruder に第 1 アクセントが置かれる.

(10) 「あのケーキ，どうした？」「ああ，（あれは）ハンスが食べちゃったよ.」

M: Wo ist denn das Stück Torte hin?
where is$_{\text{-3SG}}$ $_{\text{PART}}$ the piece cake$_{\text{-NOM}}$ off
あの一切れのケーキはどこにいったの？

N: Ach, das hat **Hans** schon gegessen.
oh that$_{\text{-ACC}}$ has$_{\text{-3SG}}$ Hans$_{\text{-NOM}}$ already eaten$_{\text{-PP}}$
ああ，あれはハンスがもう食べた.

【目的語主題化，主題（目的語）の継続性，いわゆる pro-drop 言語の可能性】N の応答文では, M の疑問文中の das Stück Torte「あの一切れのケーキ」を指示代名詞 das で再提示し，主題として文頭に置いている．この das を省くことはできない．応答文では Hans にアクセントが置かれる. なお M の疑問文の denn は, 質問の調子を和らげる(8)の denn とは異なり，話し手の〈疑問〉の気持ちを表している.

(11) 「私が昨日お店から買って来たのはこのりんごだ.」

a. ??Es sind **diese/die** Äpfel, die ich gestern in dem Geschäft gekauft habe.

it$_{\text{-NOM}}$ are$_{\text{-3PL}}$ these/the apples$_{\text{-NOM}}$ that$_{\text{-REL-ACC}}$ I$_{\text{-NOM}}$ yesterday in the shop bought$_{\text{-PP}}$ have$_{\text{-1SG}}$

この/そのりんごだ,（それを）私が昨日その店で買ったのは.

b. **Das** sind die Äpfel, die ich gestern in dem Geschäft gekauft habe.

that$_{\text{-NOM}}$ are$_{\text{-3PL}}$ the apples$_{\text{-NOM}}$ that$_{\text{-REL}}$ I$_{\text{-NOM}}$ yesterday in the shop bought$_{\text{-PP}}$ have$_{\text{-1SG}}$

これが昨日お店で買ったりんごだ.（＜これがそのりんごだ,（それを）私が昨日その店で買ったのは.）

(11-2) 「私が昨日お店から買って来たのはりんごだ.」

Es sind **Äpfel**, die ich gestern in dem Geschäft gekauft habe.

it$_{\text{-NOM}}$ are$_{\text{-3PL}}$ apples$_{\text{-NOM}}$ that$_{\text{-REL-ACC}}$ I$_{\text{-NOM}}$ yesterday in the shop bought$_{\text{-PP}}$ have$_{\text{-1SG}}$

りんごだ,（それを）私が昨日その店で買ったのは.

【分裂文】ドイツ語には一般に［Es ist/sind X＋関係文］というパターンの分裂文が認められ, X を強調するために用いられるとされている（Duden 2009: 1035f.）. [6] このパターンに従うと(11)の日本語に対応するドイツ語文は a のようになる. この文は文法的には正しいが, インフォーマントによれば，目の前に diese で指示するようなりんごがあるのならばまずそれを das などで指し示して，b のように「これが昨日あの店で買ったりんごだ」とする方が自然だとのことである．diese を定冠詞 die に代えても容認度はあまり変わらない．匿名の査読者からの「11a の不自然さの理由は強調構文なのか？」という指摘を受けて再調査したところ，(11-2)のように diese「このりんご」ではなく，不特定の「りんご」とすれば容認される文となった. [7]

(12) 「あの人（女性）は先生だ．この学校でもう 3 年働いている.」

Die da ist unsere Lehrerin. Sie ist schon seit drei Jahren an unserer Schule tätig.

that.woman$_{\text{-NOM}}$ there is$_{\text{-3SG}}$ our teacher$_{\text{-NOM}}$ she$_{\text{-NOM}}$ is$_{\text{-3SG}}$ already for three years at our school working$_{\text{-ADJ}}$

---

[6] 例えば Duden (2009: 1035f.) には下のような例文が挙がっている.
Es war die Sonne, die mir am meisten fehlte.
it was$_{\text{-3SG}}$ the sun$_{\text{-NOM}}$, that$_{\text{-REL-NOM}}$ me$_{\text{-DAT}}$ the most lacked$_{\text{-3SG}}$
私に最も足りなかったのは陽光だった.（＜それは陽光だった，私に最も不足していたのは）

[7] もっとも［Es ist/sind X＋関係文］という構文の X に dies-「この」が絶対に付かないわけではない.
Immerhin jeder 3. Bundesbürger ist Mitglied in den Verbänden des Deutschen Sportbundes. Wahrscheinlich sind es auch diese Menschen, die － nach der Statistik － mindestens zweimal pro Woche Sport treiben. (Uta Matecki, Dreimal Deutsch)　ともかくドイツ国民の 3 人に 1 人はドイツスポーツ連盟参加のクラブのメンバーだ. 統計上，週に最低 2 回はスポーツをしているのもおそらくこの人たちだ.

あそこのあの女性は私たちの先生だ．彼女はすでに 3 年前から私たちの学校に勤めている．

【措定文，主題（名詞述語文の主語）の継続性，いわゆる pro-drop 言語の可能性】第 1 文の主語は指示代名詞（女性・単数）die に場所の副詞 da が添えられており，発話の場面に居る人物を指す．これを主題として固定したまま第 2 文でこの人物についての叙述を続ける場合でも，新たに文を始める場合は第 2 文の人称代名詞を省くことはできない．

(13) 「彼のお父さんはあの人だ.」

Sein Vater ist der **Mann** da.

his father$_{\text{-NOM}}$ is$_{\text{-3SG}}$ the man$_{\text{-NOM}}$ there

彼のお父さんはあそこのあの男性だ.

(14) 「あの人が彼のお父さんだ.」

Der **Mann** da ist sein Vater.

the man$_{\text{-NOM}}$ there is$_{\text{-3SG}}$ his father$_{\text{-NOM}}$

あそこのあの男性が彼のお父さんだ.

(13)の【倒置指定文】も(14)の【指定文】も英語の be に当たる sein を用いて A ist B あるいは B ist A の形になる．どちらも新情報を担う der **Mann** da「あそこのあの人」の方にアクセントが置かれる．一応，日本語の例文にドイツ語の語順を合わせてはみたが，語順によって(13)と(14)の違いが表されるというわけではない．(14)も Vater にアクセントを置けば「あの人は彼のお父さんだよ」と，また sein にアクセントを置けば「あの人は彼のお父さんだよ」と解釈され得る．

(15) 「あさってっていうのはね，あしたの次の日のことだよ.」

„**Übermorgen**“ ist der **Tag** nach **morgen**.

the.day.after.tomorrow is$_{\text{-3SG}}$ the day$_{\text{-NOM}}$ after tomorrow

明後日は明日の後の日だ.

【定義文】「A というのは B のことだ」という定義文も基本的には(13)(14)同様 sein を用いて A ist B の形で表せる．文末の morgen に第 1 アクセントが，文頭の übermorgen と中ほどの Tag に第 2 アクセントが置かれる．なお，übermorgen「明後日」も morgen「明日」も副詞なので, 辞書では an dem Tag, der auf morgen folgt「明日に続く日に」あるいは in zwei Tagen「二日後に」などと前置詞句でパラフレーズしているが，(15)の定義文では副詞の übermorgen をそのまま主語にして，名詞 Tag「日」と ist で結び付けても問題ないとのことだった．引用符に入れることで品詞を捨象して「明後日」の概念のみが前面に出ていると

感じられるのかもしれない.

(16) （何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて）「私はコーヒーだ.」

a. Für mich einen **Kaffee**, bitte.　あるいは　b. Ich nehme einen **Kaffee**, bitte.

for me a coffee$_{\text{-ACC}}$ please　　I$_{\text{-NOM}}$ take$_{\text{-1SG}}$ a coffee-$_{\text{ACC}}$ please

わたしにはコーヒーを，お願いします.　　私はコーヒーをもらいます，お願いします.

【ウナギ文】日本語のような「ウナギ文」*Ich bin ein Kaffee. (=I am a coffee)は不可能．a の「私にはコーヒーを」のような表現か，b の「私はコーヒーをもらう」のような文を用いるのが普通.

(17) （注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに）「どなたがコーヒーですか？」「コーヒーは私だ.」

a. M: Für wen ist der Kaffee?　　N: Der Kaffee ist für mich.

for whom is$_{\text{-3SG}}$ the coffee$_{\text{-NOM}}$　　the coffee-NOM is-3SG for me

コーヒーは誰のですか？　　コーヒーは私のです.

b. M: Wer bekommt den Kaffee?　　N: Den Kaffee bekomme ich.

who$_{\text{-NOM}}$ gets$_{\text{-3SG}}$ the coffee$_{\text{-ACC}}$　　the coffee$_{\text{-ACC}}$ get$_{\text{-1SG}}$ I$_{\text{-NOM}}$

誰がコーヒーを受け取りますか？　　コーヒーは私が受け取ります.

【逆行ウナギ文】日本語の表現に対応するような *Wer ist der Kaffee? (Who is the coffee?)と*Ich bin der Kaffee. (I am the coffee.)は不可能．(17)の状況では，a の「コーヒーは誰のためのものか/私のためのものだ」あるいは b の「誰がコーヒーを受け取るか/コーヒーは私が受け取る」のような表現を用いる.

(18) 「その新しくて厚い本は（値段が）高い.」

Das neue dicke Buch ist teuer.

the new thick book$_{\text{-NOM}}$ is expensive

【形容詞述語文 修飾・並列・述語】ドイツ語では名詞修飾の形容詞には語尾を付け，述語形容詞は語尾を付けないのが原則である．(18)では Buch「本」を修飾する neue「新しくて」にも dicke「厚い」にも同じ -e という語尾が付いているが，述語形容詞 teuer には語尾は付いていない.

(19) （砂糖の入れ物を開けて）「あっ，砂糖が無くなっているよ！」

a. Oh, der Zucker ist alle/leer.
oh the sugar$_{\text{-NOM}}$ is$_{\text{-3SG}}$ all.gone/empty
あっ，砂糖が無い/空だ.

b. Oh, wir haben keinen Zucker mehr.
oh we$_{\text{-NOM}}$ have$_{\text{-1PL}}$ no sugar$_{\text{-ACC}}$ more
あっ，私たちはもう砂糖をもっていない.

【意外性（mirativity）】ドイツ語には「意外性」を表す接辞はない．予想外の事態に出くわしたときの気持ちの動きはohなどの間投詞で表すか, Du bist **aber** groß geworden!「きみも，ずいぶん大きくなったなあ」のaberなどの心態詞で表す．(19)の状況は，ohなどの感嘆詞の後に「砂糖は無い/空だ」あるいは「私たちはもう砂糖を持っていない」という叙述文を続けるしかない.

(20) 「午後, 誰かに会うはずだったなあ. 誰だったっけ. あっ, そうだ！田中君だったな.」

a. Ich glaube, ich wollte mich heute Nachmittag mit jemandem treffen.
I$_{\text{-NOM}}$ think$_{\text{-1SG}}$ I$_{\text{-NOM}}$ wanted.to$_{\text{-1SG REFL}}$ today afternoon with someone meet$_{\text{-INF}}$
私は思う，私は今日の午後誰かと会うつもりだったと.

b. Wen wollte ich denn treffen?
whom$_{\text{-ACC}}$ wanted.to$_{\text{-1SG}}$ I$_{\text{-1SG PART}}$ meet$_{\text{-INF}}$
誰に私は会うつもりだったかな？

c. Ach ja, das war bestimmt Herr Tanaka.
oh yes that$_{\text{-NOM}}$ was$_{\text{-3SG}}$ certainly Mr. Tanaka$_{\text{-NOM}}$
ああそうだ，それはきっと田中さんだった.

【思い出し】ドイツ語の過去形に(20)の「あっ，そうだ！田中君だったな.」や「あっ，今日は会議だった.」のような「想起の過去形」に当たる用法はない．cではdas war bestimmt Herr Tanaka.「それはきっと田中さんだった」と過去形が用いられているが，これは前の文bの時制がwollte「（誰に会う）つもりだった（か）」と過去形であるのを受けて話しを続けているからであり，Ach ja, das *ist bestimmt Herr Tanaka.「ああそうだ，それはきっと田中さんだ」と現在形で続けると不自然になる．このような文脈なしでDas war Herr Tanaka.だけで「それは田中さんだった」ということで，今思い出したという意味にはならない.

なお，(20)の第1文はa'のように「今日の午後約束があると思う」と補文の時制を現在形で表すこともできるが，これを過去形hatteにしたa''だと，約束の時間を過ぎてから思い出したことになる．このことからも，日本語の「あっ，今日は約束があった≒今日は約束がある」に相当する「想起の過去形」の用法がないことがわかる.

a'. Ich denke, ich habe heute Nachmittag einen Termin.
I$_{\text{-NOM}}$ think$_{\text{-1SG}}$ I$_{\text{-NOM}}$ have$_{\text{-1SG}}$ today afternoon an appointment$_{\text{-ACC}}$
私は思う，私は今日の午後約束があると.

a''. Ich denke, ich hatte heute Nachmittag einen Termin.
I$_{\text{-NOM}}$ think$_{\text{-1SG}}$ I$_{\text{-NOM}}$ had$_{\text{-1SG}}$ today afternoon an appointment$_{\text{-ACC}}$
私は思う，私は今日の午後約束があったと.

尤も，現在のことを表す過去形の用法がないわけではない．d は料理を運んできたウエイターの発話として，e は教授に証明書のサインをもらいにきた学生の発話として用いられ得る．d は「すでに情報を得たはずだが，念のため確認しておきたい」と質問に丁寧さを与えるために（Hentschel/Vogel 2009: 352），e は「あたかも現時点のことではないかのように表すことで，要望の直接さを緩和する」ために（Boettcher 2009: 52）過去形が用いられている．

d. Wer bekam das Schnitzel?

who$_{\text{-NOM}}$ got the escalpe$_{\text{-ACC}}$

誰がカツレツをもらいましたか？（＝カツレツはどなたでしたか？）

e. Ich wollte Sie (nur kurz) fragen, ob Sie mir den Schein unterschreiben.

I$_{\text{-NOM}}$ wanted.to you$_{\text{-ACC}}$ (only briefly) ask$_{\text{-INF}}$, if you$_{\text{-NOM}}$ me$_{\text{-DAT}}$ the certificate$_{\text{-ACC}}$ sign$_{\text{-2SG}}$

私は（手短に）お尋ねしたかった，あなたが私に証明書にサインをするかを．（＝証明書にサインをいただけるかお尋ねしたいのですが．）

参考文献

Boettcher, Wolfgang. 2009. Grammatik verstehen I – Wort. Berlin/New York (Walter de Gruyter)

Duden. 2009. Die Grammatik. Herausgegeben von der Dudenredaktion. 8. überarbeitete Auflage. Mannheim/Zürich (Dudenverlag)

Hentschel, Elke/Petra M. Vogel. 2009. Lexikon Deutsche Morphologie. Berlin/New York (Walter de Gruyter)